

【資料紹介】

池田英雄著『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』(三)

浅沼薫奈

【解題】

本稿は、大東文化学院本科3期生、高等科6期生である池田英雄による『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』(以下、『回想録』)について、『大東文化大学史研究紀要』第4号に引き続き紹介するものである。本稿では、「第三部 官私抗争の雪どけ『大東文化大学』と、『無窮会東洋文化研究所』の両所にわたってご勤務の方々について」を紹介する。池田英雄氏の経歴詳細及び『回想録』目次(構成)全容については、『大東文化大学史研究紀要』第三号、第四号に紹介した『回想録』に付した拙著「解題」を参照されたい。

『大東文化大学史研究紀要』前号までにおいてすでに紹介してきたように、池田英雄は大東文化学院本科及び高等科において計六年間を学んだ後、1933(昭和8)年より自身の母校でもある財団法人日本中学校の漢文科教員を勤め、敗戦後(新制)は幾つかの都立高等学校を中心に漢文科教員を続けた。同時に、財団法人無窮会東洋研究所で募集した研究員一期生に応募し合格、以降は同研究所での活動を中心により本格的な漢学研究を続けることとなった。

本稿で紹介する第三部においては、大東文化学院在学中及び無窮会東洋研究所で学んだ折に出会った印象深い人々のなかから、その後に大東文化学院(大学)教員となったか、あるいは財団法人無窮会東洋研究に勤務し研究を続けた人々を紹介したものである。先輩、同期、後輩まで年齢層も幅広く取り上げられているが、池田氏にとって特に思い出深い恩師5名については第四部で改めて別に紹介しているので、ここでは所

謂「同じ釜の飯を食べた」同士たちとの思い出を中心に回想したものとなっている。それぞれの文にはかなり長短があるものの、全部で11名の名前を挙げて交流した当時を懐かしく綴っている。

なかでも特に注目したいのは、第三部のタイトルにある「官私抗争の雪どけ」と池田英雄がとらえた点である。「雪どけ」と考えたその時期、どのような出来事を契機にして英雄はそう考えたのか。これまで紹介してきた『回想録』において、「平沼先生と志を同じくした教職員一同は、こぞって総辞職された。この折り先考蘆洲もまたその行動を共にした。かくして平沼先生の大東文化学院創設に託した理想の夢は空しく挫折をみることに成った。これら教授を中心とする方々は一致団結し、当時西大久保に在った無窮会に拠って将来への展望をえがき、初志の貫徹を期したのであった」と述べている通り、大東文化学院の理念は創立2年目には「挫折」し、改めて財団法人無窮会東洋研究所のなかにこそ「貫徹」された、と英雄はとらえたのである。ただし、辞職した「私学派」教員は2年後にはその多くがいったん大東文化学院へ復職しており、その復職時には今度は「官学派」教員が一斉辞職しているという経緯もあり、また大東文化学院の教育課程はその際にほぼ創設時のものに改定され戻されたため、英雄が指摘する点は教員構成やカリキュラムなどの教育面ではなく、おそらくもっと根底にある何か精神的なものを指していたのではないかと推測される。池田英雄によれば、本当の意味で「官私的交流も始まった」と見られるのは昭和20～30年代としており、学院紛擾から実に30年近い年月が必要であった。

以下、本文を掲載するが、念のために取り上げられた11名を示しておく。清田清、清田多賀代、原田種成、妹尾勇、濱氏父子（濱隆一郎・濱久雄）、栗原圭介、進藤光正、河村広通、石井勲の各氏である。なお、濱隆一郎については、以降に続く「第四部 恩師片影」でも最初の一人目に挙げて懐古した「恩師」であり、英雄にとって最も思い出深い尊敬する恩師の一人であったようである。また、石井勲について本文中で「元

大東文化大学幼少教育研究所々長」との記述が見られるが、同研究所についてはあまり馴染みがないかもしれないため補足しておく。

大東文化大学幼少教育研究所は、1970年代にごく短期間設置されていた、大東文化学園に付属した研究機関であり、1970(昭和45)年4月28日の大東文化大学理事会において設置決議されたものである。その活動目的には、「本学の歴史的経過を基礎として、従来本学のとってきた、社会教育並に教員養成部門の充実に資するため、国内外にこれまでややもすれば等閑視されていた、児童、幼児教育についてその未開発面を研究し実験する場として本研究所を設置し、将来の日本の教育指導体系に貢献せんとすの意図から発想されたもの」との説明がなされ、初代所長に石井勲を迎えることとなった。しかし目立った活動業績を残すことなく同研究所はごく短期間で閉じることとなり、その後石井勲は大東文化大学青桐幼稚園の園長として幼児教育に携わりつつ、自ら「石井教育研究所」を立ち上げて独自の幼児を対象とする漢字教育実践を重ねていったという経緯がある。

【解題者注】

原稿について、基本的に原文をそのまま掲載しているが、①本文中の明らかな誤字等については適宜修正を加えている。また、ごく一部に旧カナ遣い等が見られたが、現代カナ遣いに整え統一した。一方、敬体と常体との混在使用はそのままとした。②『回想録』第三部以降については本稿では掲載を省略し、引き続き次号以降に掲載を検討するものとした。

『修学の道場回想録 —七十年前の思い出の糸をたぐりて—』

第三部 官私抗争の雪どけ

「大東文化大学」と「無窮会東洋文化研究所」の両所にわたってご勤務の方々について

○官・私抗争の雪どけ

嘗て大正の終りから昭和の初めにかけて、官・私の両学派には執拗に漂っていた暗雲も、時の流れとともに、いつしか消えうせて、昭和二・三十年代を迎える頃にはようやく明るい日ざしをみるに至った。そして官・私互の交流も始まったのであった。

次には、嘗ては相対立をみた大東文化学院と、無窮会東洋文化研究所との双方にご関係なされ、日頃尽力を惜しまれなかった方々の、それぞれのご業績について、私の知るところを記しておきたいと思う。

○清田清先輩の度量

久しい間、官私両者の間を固く閉ざしていた扉を押し開けて、互の交流に尽した最初の方は、その昔、私学派恩師の総辞職に殉じ、決然として中途退学の拳に出た本科生清田清氏その人であった。昭和三十年代当時の清田氏は財団法人無窮会での要職に在ったが、嘗ての自己退学に追い込まれた大東文化大（当時の大東文化学院）の旧怨を自ら払いのけ、請われるままに同校への出講を受諾している。この間の経緯については、自著「ハイティン教育五十年」の中に、さらりと次のように記している。

“私は昭和三十一年から大東文化で日文（日本文化学科）と、中文（中国文学科）との国語科教職課程を担当した。”（同書二三二頁）と述べている。これは氏が決然として退学した後の二十余年後に当る。嘗て自主退学した母校への回帰には定めし、その心中計り知れぬ想いがあつたにちがいない。然しながら過去のわだかまりを乗り越えて、自ら進んで両学派の融和発展の為に一身を挺し、両者間疎通への先駆者となった。

学兄は晩年に至って、過ぎ越し方を回顧して「漢文学五十年」なる著作を出版された。そして、その折りに嘗ての大東文化学院の総長であった文博井上哲次郎先生に序文を乞うた。井上先生は快諾され、その序文の冒頭に次のように述べられている。

“清田君は漢字漢文の教育に五十年近い情熱を傾け尽してきた人である。敗戦後占領軍当局の意図もあって漢文が教育界から追放されそのような形勢に陥った時、君は同志と共に、その復活振興のために、献身的な努力をつづけた。云々”

とある。

誠に学兄の漢文学復興の為に一身を投じ同志とともに寝食を忘れて活躍されていた姿が、そぞろに思い出されてならない。

(私のひとりごと) ——清田学兄は戦後のひととき、西大久保の無窮会の構内に居をかまえていた。そこは余り広いとも言えないが、独立した一軒屋で静かなところであった。ここは職住一致というわけで、会の行事を企画したり、実行に移したり諸事にわたって便宜であった。ただ屋がやや狭いようにお見うけした。その後無窮会が玉川学園に移ると、学兄も同じ玉川学園に土地を購入し、自宅を建てられた。そこは無窮会とは小田急線をはさんで相對峙する丘の上の高爽静寂な地であった。そして、そこに理想の家を建てられた。私はこのご新居へ随分とお邪魔し、そして心からなる歓待を受けた。そのおりのよもやま話の中の一つに、“昨日は日比谷高校の卒業生が訪ねて来て、互に人生観を語りあい、ふと気がつけば、早やいつしか夜半を過ぎていた。”などと楽しげに語られることも屢であった。この頃、学兄は已に初老の境に突入されておられながら、疲れをみせず、血氣盛りの若者と^(ママ)互格に夜を徹して論じ合う、その気力には思わずも圧倒された。そしてこのようなことも屢であった。このようにして常に健脚を誇っておられた。然しながら古希を過ぎる頃からは脚力も衰えて、会合などにはご夫人の付きそってのご出席が多かった。また学兄は総ての行動に積極的であったが、ただ一つの弱点としては寒

さに弱いことであった。この点ではこの私も同様であったから、この「寒さ」のこととなると話はよく合った。

学兄は玉川学園の地に、いよいよ新居を築かれるという折り、私がお訪ねすると「書斎は北側につくりたい、南側に造ると誰しも眠くなるので、古来学者はみな北窓を選んでゐる。云々」と話されて、遂に実行に移された。この後この寒い北窓に向って机をしつらえ読書執筆にはげんでおられた。私は前述のように学兄に劣らぬ寒がり、書斎は常に南窓を選んでゐる。もしも眠くなれば一先ず寝て、また起きて筆を執り、書を読めばよいと思っている。

学兄に対する私のイメージと云うか、思いを総括すると、凡そ次のように思われる。

“無窮会に在っては、主事となり理事ともなって、経営の尤も困窮時代に尽力され、大いに会の発展に寄与された。その人と為りは熱血にして沈着、よく物の道理をわきまえて、果敢に前進開拓するの人であった。その風貌は辺幅を飾らず、頭髮は丸刈りにし、久しく奉職された日比谷高校の教え子からは「坊ちゃん」の愛称を贈られ慕われていた。”

〔清田清氏の略歴と著作品〕氏は明治三十三年六月（1900）、福岡県に生る。長じて福岡師範を卒業の後、大東文化学院本科に入るも、いわゆる学院紛争によって自主中退、その後、いくばくも無くして、中等教員文検に合格。無窮会諸事に専念するとともに、都立日比谷高等学校・駒場東邦高等学校等に教鞭を執った。

著書には、『ハイティン教育五十年』昭和四十八年四月（1973）清田清著、角川書店刊

『漢文教育五十年』昭和四十九年九月（1974）清田清著、角川書店刊。

その他に『ホームルームの記録』（共著）、『孔子家語』、『漢文のまとめ』、『漢文解釈』、等々。この他、高等学校漢文教科書（共著）など多い。

○清田多賀代夫人の人と為りと、無窮会へのご厚志に感激す

清田多賀代夫人の日常は辺幅を飾ることなく、やさしく人に接しられ真に誠実の方であった。殊にご家庭に在っては夫君を援け、いわゆる内助の功に富んでおられた。夫君の清田氏が書齋にこもり執筆の折りなどには常に傍に座して、原稿の浄書や整理などを手伝い、また時には書信の代筆なども為さっておられた。

清田氏は生来の健脚を誇り、青壮年の頃には親交の河又武司等と共に登山を楽しまれておられた。しかし齢七十を二、三越える頃からは脚力頓に衰えて、講演や集会等への出席には、夫人が同伴し夫君は助けられるのことが多かった。それは、むつまじく影の形にそうの如き観があった。このようなやわらいだご家庭を築かれながらも、ご夫妻の間にはお子様がなかったから、夫君のご逝去の後のご生活は淋しくお見受けした。そしておなぐさめ申す言葉も見当らなかった。

当時、幸にも多賀代様の郷里なる福岡県田川市にごくごく親しい親戚の木村貞幸様、同梨江様から、帰省して永住されてはいかが、互に助け合っていきたいとお誘いがあった。ここに於て夫人は帰省を決意され、数々の夫君との思い出を抱いて、東京を去ることとなられた。

このような事情にて、嘗て夫君と共に営々として建てられたこの思い出多い家を手放すことを決意された。そしてその見返りとして入手したこの家屋売却の代金のうちから、少なからぬ金子をさいて無窮会へ寄贈された。この寄付を受けられた当時の無窮会会長平沼恭四郎氏はいたく感謝され、この夫人の厚志に対して、心からなる感謝状を贈っている。そしてこのことは無窮会発行の季刊誌『東洋文化』の誌上に次のように掲載されている。

報告 故清田清先生御令室多賀代様よりの御寄付の報告

昨年十月、元本会主事・理事として、戦後の会の再興に心血を注いでくださった故清田清先生の令室多賀代様より、金壺千万円という御浄財の御寄付がありました。恰も旱天に慈雨を得たように関係

者一同感激した次第です。

就中、御入院中であつた平沼理事長に御報告申し上げたところ、涙を流してお喜びになり、早速「感謝状」をお届けして欲しいとの御下命がありました。

常務理事会で感謝状の案文を作成し、理事長の御了解を得て、次のような文面で清田多賀代様にお届けいたしました。

平成四年二月二十五日印刷

平成四年三月一日発行

編集兼発行人 財団法人無窮会

感謝状

清田多賀代殿

あなたは、このたび御主人故清田清先生が戦後の無窮会の再建に心血を注いでおられたことに思いを致され、玉川学園の地を離れられるに際し、ここに壱千万円という高額の御浄財を御寄付下さいました。関係者一同感激致しますと共に、御芳名を後世にお伝えすべく早速敝会運営のための基本財産に繰り込ませていただきました。

ここに謹んで感謝の意を表します。

平成三年十一月吉日

財団法人 無窮会

理事長 平沼恭四郎

(付記) その後、夫人多賀代様は、無事田川市の故郷へ帰られ、木村氏一家の手厚い庇護の下、静かな生活に入られている。これより先、夫人は東京を去るに当って、今は亡き夫君清氏が無窮会東洋文化研究所発展の為に尽瘁されたその志をついで、我が屋を売却した金子の一部をさいて会へ寄贈されている。私は、この夫にしてこの妻ありの感に心打たれて、思はずも頭の垂れる思いにかられた。

○原田種成氏との友好（若かった頃の話）

原田氏との出会いは随分と古い。それは昭和四年（1929）、私が大東文化学院高等科一年に進学の春、同氏は本科へ入学されたわけで、いわば私の三年の後輩と云うことになる。氏は旧制の中学からストレイトでの入学であったから、級中での一番若く、紅顔の中々の美少年であった。その頃のおもかげを伝えるものとしては、同氏著『漢文のすゝめ』のP4に本科へ入学当時の写真が掲載されている。氏は本科から高等科へと進み、前後六ヶ年の学業を修了し、優秀な成績で卒業された。高等科時代には、当時、大東文化学院にご出講の文博諸橋徹次先生の元に参じて、「大漢和辞典」の編纂に携わっていた。同科卒業の後は同辞典の編纂院となつて、昭和二十年二月の戦災による編纂事業の中止に追い込まれるまで、つづけておられた。

氏は右記^(ママ)の経歴にみるように、学院の紛争時に在っては、むしろ官学派に属する人であった。しかし昭和十五年（1940）に無窮会東洋文化研究所が開設されるや、嘗ての中学校時代の恩師であり、当時、無窮会の役員であった相良政雄氏のすすめを受けて、同研究所の高等科第一期生として入学された。ここで端しなくも私は再び机を並べて共に研学にいそむことと成った。かくして凡そ二ヶ年を過ぐる頃、私はフトしたことから風邪をこじらせて臥床の身となり、遂に学業を続けることが出来なく成ってしまった。惜しい哉、あと一ヶ年と云うところで、やむなく中途退学に追い込まれ涙をのんだ。原田氏は健康を保ち、三ヶ年の学業を修了し、翌昭和十八年三月に卒業された。この昭和十八年と云う年は、日米戦争がいよいよ熾烈を極め、我国の敗戦はいよいよ色濃くなった。日本軍は心ならずもガダルカナル島から撤退を開始し、太平洋に於ける戦局の主導権は、次第に米国へと移り始めた。一方、国内に在っては、学徒勤労動員令によって、学徒らは学業をすて、こぞって勤労奉仕に従うこととなった。戦後の記録によれば、戦争の末期から敗戦に至るまでに、約三〇〇万人の学徒動員があったとのことである。

私は昭和十七年春（1942）東洋研究所を無念の退学をしたが、その後は幸に病も癒えて、この年の秋には日本中学校教諭の職に復し、爾後、終戦の昭和二十年までは、動員命令の下、教え子を引率して東京市渋谷区の某電灯工場へ出張していた。

当時一億国民は、こぞって大本營の戦果の発表、一喜一憂したものであった。然るに戦況は思うにまかせず、遂に敗戦へと突入し、昭和二十年八月十五日には天皇陛下の戦争終結の、いわゆる玉音放送があり、これを聴く一億の国民は皆泣いた。ついで八月廿八日^(ママ)には早くも連合国軍最高司令官マッカーサー元帥が厚木に到着し、この秋には財団解体、九月には文部省は中等学校以下の教科書の記載の文中から、伝統的思想の部分の削除を通告し、これに従って、児童・学徒は現在使用中の教科書の、該当ヶ所^(ママ)をあちこちと墨で塗りつぶすなど、終戦を境に我国の教育指導の方針は目まぐるしく変えられた。就中、最も被害を被ったのは「漢文」であった。

当時は教育制度も教育方針も、その総てを占領軍の米国の指揮の下に置かれた。このような世状の下に在って漢文教育は滅亡の危機にひんした。ここに於て全国漢文担当の士は同志を結集し、いわゆる「漢文懇話会」を結集し、漢文振興運動を展開した。懇話会代表には都立第四高校教諭の福島正義氏が当り、長沢規矩也・清田清等の諸氏を始めとする大学・高校関係者等、相提繫して同志を糾合し献身的努力を重ねていた。話は大分原田氏の思い出からそれてしまったが、同氏も相共に漢文復興運動に向って献身努力を惜しまれなかった。

敗戦後のひとときは、高校に於ける漢文を廃止しようとするのみか、我々日本人の日常生活に使用されている総ての漢字を廃し、全面的にローマ字を採用しようとする、いわゆるローマ字普及運動が世を挙げて熾烈を極めた。そして、今回の敗戦の原因の一端は漢字文化に因るとの言動が世上に横行した。このようにローマ字運動が横行し、漢字の学習は尤も軽視されつづけたのであった。このような風潮の中に在って漢文復興

運動に力を尽した学兄諸氏の苦労は容易なものではなかった。

当時、法政大学教授であった長沢規矩也氏もまた漢学・漢字の復興運動に一眼識を持っていた。折りしも米国在住の邦人団体から次のような依頼があったと私に相談された。その依頼とは、“米国在住の学童に漢字を教えたいが、当時には適当な書物が見当らないので、一つ良い書物を紹介してほしい。”と云うものであった。この依頼を受けた長沢氏とまた要望を満たせるような極々やさしい学童向きの書物の我国にないのを憂えて、“私に、先方の要望を満たせるような極めてやさしい漢字の解説書を書いてほしい。”との依頼があった。私は快諾しこの要望に応じて書きあげたのが、拙著『漢字の教室』勉成社刊で、時に昭和二十九年（1954）のことであった。またこれと時を前後して原田種成氏は学徒向きの『漢字と漢語の常識』なる標題の小冊子を知新堂から刊行された。このような次第にて、この戦後のひと時は共々に相会して文字学について、語りあうことが多かった。当時、我等兩人の他に、斯文会で活躍されていた松井武男氏も漢字に関する一書を編まれ、共々に戦後の漢字再興運動の一角を荷った。

話は代わるが、原田氏と私の兩人は、前述の文博長沢規矩也氏のお供(ママ)をして群馬県立某高校（校名失念）へ学術講演に出かけた思い出がある。この長沢氏は中々頭のきれなる着想の豊かな方であった。氏はこの高校よりの依頼を快諾したものの、自分独りで行くのも何か軽々しい、については君等兩人を帯同して行きたい。兩人はそれぞれに前座をつとめよと云うことで、原田君と私はお供をし、講演の会場では、それぞれに短い時間ながら「漢字学習法」についての話を致し、前座をつとめたことを思い出す。…また思い出の一つに、原田氏と私は時折り長沢氏からの招集を受け、九段下の漢籍専門店「松雲堂書店」の座敷に参集し、ここで新しく入荷した珍書の品定めの実態を見学させられた。これら、そぞろに思い浮ぶ私等の若かった頃のことながらも、早や六十余年前のこととなり、なつかしい思い出の長沢氏も、原田氏も今は已に道山へ帰してしまわれ

た。残るものは一抹の淋しさのみ。そぞろ思い出にふけるこの頃である。

○原田氏の著作について

氏は、久しく母校の大東文化大学文学部教授の職に在り、また財団法人無窮会東洋文化研究所の講師と為って尽力された。その傍、著述に力を盡し、その量はいわゆる等身の書の概がある、就中、最も力を注ぎ尽した、その代表的なものとしては、貞観政要の研究（学位論文）吉川弘文館、昭和40年（1965）刊。晩年に氏がその全力を傾注した訓点本四庫提要（経・史・子・集にわたり）の刊行、これは昭和56年（1981）に始まり平成3年（1991）に完結。通計10ヶ年の努力の結晶であった。

○妹尾勇氏との思い出

妹尾氏と始めてお会いしたのは昭和二十八年（1953）、今からもう五十余年前のこととなる。爾来今にご交誼をいただいている。氏もまた大東文化学院と無窮会との双方に関与されておられる。氏のご経歴を尋ねてみると、氏は青雲の志を抱かれて古郷の島根県立太田高等学校教諭の職を辞して上京され、東京都立豊多摩高等学校へ講師として赴任された。折りしも私は同校の教諭として奉職中で、相会して互にこの会合をよろこびあった。同氏は大東文化学院での私の後輩でもあり、且つ又この人のひたむきな攻学のあり方に接して、会う毎に真に心の洗われる思いにかられた。この妹尾氏は、早くも、この年の秋には都立第三商業高等学校へ教諭として栄転されることとなり、豊多摩を去られた。私はこの栄転を祝しながらも、限らない別離の淋しさを味合った。

その後、氏は文部省国語科指導要領委員を拝命したのを皮切りに東京都教育課程編成要領委員会等の重責を荷うこととなって、教育指導の面に於て大いに手腕を振われた。これよりも先、戦後の「漢文復活運動」には先輩の清田清氏に従って大いに活躍され、「全国漢文教育懇話会世話人」となって、「漢文」の復活運動のために東奔西走力を尽された。

氏はまた無窮会とのかかわりも深い。氏は昭和三十六年(1961)から無窮会で同志と、ともに松本洪、清田清の両先生を講師と仰ぎ、高等漢文教材の研究を前後五ヶ年間に渡って行っている。これより先、昭和三十二年(1957)に、都立日比谷高校長の菊地龍道氏が当高校を辞して、新しく私立駒場東邦高等学校を創設されることとなった。この時、清田先輩は、この思い出の深い日比谷高校を辞して、菊地校長に従い、新設校の創設に尽力された。この折り、日比谷高校の自分の後任に、妹尾勇氏を推挙している。後日、清田先輩は私に、「妹尾氏こそ自分の後任として推挙するに尤もふさわしい人物であると確信している云々」と当時のいきさつを熱っぽく語られたことを今もなお昨日のこのように思い出すのである。

学兄との友好を重ねるうちに、いつしか星霜は過ぎ去って、いつもお若いと思っていた妹尾氏も、はや傘寿を二つ三つ超えられ、愚生に至っては百才に僅か二ヶ年余を残すのみと成ってしまった。そして、いつの頃よりかお互いの往来もとだえがちとなって、今この思い出をつづりながら、そぞろ旧時を追懐し、感慨無量となるを覚える。

妹尾氏には漢文教育・漢学指導に関する著作が多い。^(ママ)左にそのうちの二・三を挙げてみたい。氏は「故事成語新選」昭和三十一年・共栄出版、を皮切りに、「論語・孟子新解」昭和四十三年・新塔社刊、「漢文提要」昭和三十六年・共編・新塔社刊、「経書の指導と実践」昭和三十七年・高校教育実践講座・学灯社刊、等々がある。

○なお書きもしたが、氏は大東文化学院高等科の第二十一期生として、昭和二十二年度に卒業されている。

○^(ママ)浜氏父子二代にわたってのご交誼に感謝する

・浜久雄氏との交友に想う

私は巖父浜隆一郎(青洲)先生に幼少の頃からお世話になり、前後通計、凡そ七十年の久しきに及んでいる。このご縁にて御令息、久雄様と

もご交誼をいただいて今日に到っている。青洲先生から受けた教訓は数限りなく、中々筆説には尽しがたいものがあるが、この思い出は改めて次頁へゆずりたい。(解題者注:「第四部 恩師片影」にて「青洲先生の慈愛」として思い出の記が記されている。)

私のご長男の久雄氏のお若い頃のことは、青洲先生から断片的に伺い知るに止まり、あまり詳しくは存じあげない。久雄様に直接ご交誼いただくようになったのは、かれこれ私の古稀に近づく頃であったから、今から凡そ三十年程前のこと、丁度氏の五十才前後のことと思われる。当時私は亡父の遺稿「史記補注」の刊行をようやく為し遂げて、次なる仕事の「史記研究書目解題」の刊行を志し、史記に関する古今歴代の諸版本を初めとし、いっさいの史記関連書を求めて、全国の有名図書館を訪ね歩いてきた。その折り、東京大学東洋文化研究所、ならびに、東京大学図書館のご蔵書は幸いにも蜂屋邦夫教授のご紹介を得て、向後一ヶ年間の閲覧許可証をいただき、これより幾度となく足繁く通館し、貴重書の総てを心ゆくばかり見せていただいた。この頃、この閲覧室で、時折り久雄氏と遇えし、久濶を慰した思い出がある。当時の氏は都立高等学校の教諭の職に在ったから、その校務の忙しさは一方ならぬものが有ったであろうし、その上、お住まいは立川の先の「あきる野市瀬戸岡」に移られておられたから、同図書館までの道のりは遠く中々に容易なことでは無いと思われた。この繁忙さと遠路とを克服し、たまたまの寸暇をさいて、都心のこの大学まで通われるご熱意には強く心打られた。当時、私のご父君の青洲先生のもとへは屡お伺いしながらも、久雄様とはなお、疎遠に近かったので、この図書館で折角おあいしながらも、ご挨拶程度でお別れしてしまっていた。

氏は都立高校ご勇退の後、母校の大東文化大学に移られ、文学部長の要職に就かれた。そして畢生の研究テーマなる公羊学の研究にて文学博士の称号を授けられている。その著「公羊学の成立とその展開」は、平成四年(1992)株式会社国書刊行会から刊行されている。

この頃と前後して氏は無窮会東洋文化研究所への来られるようになったので、この後はお会いするチャンスにも恵まれ、親しくお話するのを楽しみに、今日に及んでいる。氏は現在、無窮会東洋文化学会の理事として、また、無窮会専門図書館々長として活躍されている。氏は大東文化大学と無窮会東洋文化研究所との双方の事情に精通されている稀なる存在の一人である。

私は常々思うことであるが、氏の風貌は父君青洲先生に酷似されておられる。見るからに体躯豊かにして温和、研究の余暇には美酒を嗜み、また漢詩を賦され、月旦評にも巧みなど、その人と為りと、ご嗜好までも、先考に酷似されている。更にそのご筆跡は悠揚迫らぬ整体にて、そぞろ先考先生の書かれたものかと思えるばかりである。学兄寿八帙にのぼられ、その学は先考青洲先生の衣鉢をつがれたものと存上げる。

○久雄氏には著書が多い。一書成る毎にその都度、ご惠贈いただき有り難いことと思っている。私の記憶では、最初にいただいたのは、(1) 西太后(教育社刊)であった。ついで、(2) 蘭学事始「杉田玄白原書」浜久雄訳(昭和五五年、教育社刊)であったと思う。その後は次の名著を休みなく次々と刊行されている。

- (3) 公羊学の成立とその展開 平成四年(1992) 株式会社図書刊行会刊(六〇〇頁余の大作)
- (4) 牧野黙庵・松村遺稿 平成十年(1998) 汲古書院刊(三九八頁)
- (5) 山田方谷の文 一方谷遺文訳解 平成十一年(1999) 明德出版社刊(六二二頁の大作)
- (6) 明夷待訪録 平成十六年(2004) 明德出版社刊
- (7) 牧野黙庵の詩と生涯 一江戸漢詩性霊派の後勁 平成十七年(2005) 明德出版社刊(三五八頁)
- (8) 「陽明学全集」第8巻に共著の形で執筆さる 明德出版社刊

○栗原圭介学兄の立志好学

学兄は今日齢已に九秩を遥かに越えながらも矍鑠として好学の志少しも衰えず、日々研鑽、今日なお現役として後輩の指導に当たっている。その気力と好学の志とは余人の追隨を許さぬところである。

学兄の自ら記された「我が足跡」なる一文を拝誦すると大略次のように述べられている。「…不況の大正始めの寒村に生れ、ご家庭も豊かではなかった由にて、上級学校への進学は断念せざるをえず、高小卒後は、大日本国民学会に入会し、中学講義録によって学習し、昼間は父君の農業を手伝い、学習時間は、夜間や雨の日に限られていた」よしにて、一読誠に胸に迫るものを覚える。学兄はこの恵まれない環境にもめげず、刻苦勉励、遂に今日の大をなされた。その終始変らぬご気力には思わず頭の下る思いがする。

学兄の学績を尋ねてみると、お若い頃には説文（文字学）を治められた由にうかがうが、爾後、研究の主体は専ら三礼についての攻究にあり、早くも昭和三十六年（1961）には「三礼鄭玄の基礎的考察」によって、東洋大学から文学博士の学位を授けられている。爾来学兄は、中国古代に於ける礼学・宗教学等に関する諸論考を相次いで発表され、その研究は休むことなく今日に及んでいる。その傍、諸大学、並に無窮会東洋文化研究所に在っては、後進の指導に当られ、家に在っては常に論文・著作にご専念、筆を休めることを知らない。最近、濱久雄氏の評によれば、“学兄の著作発表の数量は、無慮年毎に平均して六篇の多きに及ぶ”と云うことである。その思考の尽きることなく、恰も水の滾々と湧き出ずるが如き、その根源は果して何によるものであろうか。私はふと孟子の「原泉滾々として昼夜を舍かず、…本あるものは是の如し」の章句を想い浮べ感嘆すること久しい。

私が学兄を知り初めたのは学兄がまだ明治大学附属明治高等学校に教鞭を執っておられた頃であった。それは戦後の間もない頃であったから、それより早やくも幾星霜を経て今日、指折り数えてみれば優に六十年の

時を過ごしたことになる。この間、絶えることなきご交誼をいただき誠にありがたいことである。然しながら、お互いは家庭を訪ね合ったと云うことも無く、また共に旅に出て浩然の気を養ったと云う思い出もない。お会いするのは決して無窮会東洋文化研究所か、その催の会場の席上に限られていた。これは一つに愚生があまり他の学会に顔を出さぬ為めなのかも知れない。ただし会面の折り折りには、いつも懇懃丁寧なるご挨拶をいただき恐縮する。^(ママ)話柄は常に学界の動行や学術のことに終始する。私は思わずも緊張する一時である。

先年お会いした折りには珍しく九帙を越えられた最近の日常生活について話された。その話というのは“自分は毎朝鶏鳴と共に起き、ラジオ放送を聞きながら、英・独・華などの数ヶ国の学習をつづけている”というもので、齢九十才の大台にのぼりながらも、なお早起して語学の学習にいそしむと云う、その気力に圧倒されながらも、かくまでして外国語を修得されようとする学兄の真意までは理解しえなかった。その後、贈られた「栗原圭介博士頌寿記念 東洋学論集・平成七年三月 汲古書院刊」の冒頭を飾る浜久雄博士の序文をよむに及んで、学兄の早起学習の真意を知り、更に感動を深めることであった。その浜氏の文とは、凡そ次のように記されている。

“先生は説文会、斯文会、日本中国学会、東方学会、無窮会、日本宗教学会、日本道教学会、日仏東洋学会等に参加され、研究発表大会には必ず参加されるほか、四年ごとに開催される国際学会にも出席され、英語で研究成果を発表されます云々。”

というものであった。

これをよんで、改めて学兄の矍鑠ぶりに改めて驚嘆し、平素より智力と意欲と体力との、この三者を培養されていることに強く心をうたれた。

○学兄の端正な書風に思う

私は屢書信をいただいているが、常に思うことは、学兄の筆跡には大

いなる特長がある。その書は正楷にして一点一画をもゆるがせにしない。誠に気力の籠った独自のものである。私は書信をいただく度に、そのご署名をみるまでもなく、一見して直ちに学兄からのものと判る。

古来、東洋の書については、「書は人なり」とか、「書は体をあらわす」とか、「書は心畫なり」とか、種々に云われている。誠に然りで、書こそは無言のうちに書き手の精神行動を映し出すものと思われる。学兄の書風の一点一画をいやしくもおろそかにせず、力強い正楷を以て貫かれている。筆蹟雄渾にして気力充満とでも云うべきであろうか。

<栗原学兄よりの書簡冒頭部分> (割愛)

○栗原学兄のご著作中より、その主たるものを誌す

1. 三礼鄭玄の基礎的考察(学位論文)未刊行、昭和三十五年(1969)
2. 礼記宗教思想の研究(自家出版)明治大学研究成果刊行助成金交付に依る
3. 中国古代樂論の研究(大東文化大学東洋研究所)昭和五十三年(1978)刊
4. 古代中国婚姻制の礼理念と形態(東方書店)昭和五十七年(1982)刊
5. 孝経(新訳漢文体系第三十五卷)(明治書院)昭和六十一年(1986)刊
6. 大戴礼記(新訳漢文体系第百三十卷)(明治書院)平成三年(1991)刊

○学兄は大東文化大学と無窮会東洋文化研究所との双方に勤められ、双方の融和交流に尽されている。

学兄は大東文化学院高等科ご卒業以来、母校の教授となって後進を指導される傍、早くより無窮会評議員と成って、両所の融和と発展に尽くされている。学兄は已に大東文化大学より名誉教授の称号を受け、また無窮会に在っては「参与」の称号を贈られている。両所の発展も学兄に負うところが大きい。

〔閑話〕先年のこと、いつ頃であったろうか。久々に無窮会でお会いした折り、学兄からお互いの生年月日についてのお話があった。学兄曰く“自

分はあなたと同甲である”と。私は誠に奇縁だと思った。今回、学兄との思い出を綴るに当って、ご履歴を拝見すると違いを発見した。それと云うのは、学兄は大正二年四月の生れとあり、私は明治四十一年七月の誕生であるから、この間、五才のへだたりの有ることになる。因みに大東文化学院高等科の卒業も、私は昭和七年、学兄は昭和二十年であるから、この間、十三年の開きがあることとなる。思いついたまま一寸書き添えた次第である。

○遠藤光正（荃軒）学兄

学兄と知り合ってから幾年になろうか。指折り数えてみると、早くも四十年近いご交誼をいただいている。初めてお目にかかったのは学兄が無窮会東洋文化研究所ご卒業の年、即ち昭和四十二年（1967）頃であったか、と記憶している。それは学兄の三十才の央を過ぎた頃、そして私は已に還暦へ手の届く頃であった。当時、私は無窮会図書館の図書係をしていた関係から、繁く図書を見に来られる学兄については、「一途に学問に打ち込まれる方」と云った印象を受けた。但、当時はまだご研究の目標も、ご経歴についても殆んど存じあげなかった。

その後、学兄からは、研究成果なる論文、並に漢詩文・随草の数々のご作品のご恵贈をいただき、拝講していくうちに、学兄の胸中に深く秘められたる鬱勃たる闘志に圧倒される思いにかられた。——学兄のご研究は広く和漢の古典籍に及んでいる。就中、生涯のテーマとして全力を傾注された「類書」の研究では、早くも昭和五十三年（1978）に論文「類書の伝来と軍記物語」を発表され、日本中国学会より学会賞（文学部門）を授けられ、翌々年の昭和五十五年（1980）には研究テーマ「類書の伝来と和製類書の研究」の下に、無窮会東洋文化研究所特別研究員（三ヶ年の継続）に採用され、ついで、昭和五十七年（1982）には、多年の研究成果見事にみのって、学位論文「類書の伝来と明文抄の研究」によって、東洋大学より文学博士の学位を授与されている。そして翌々年には、学

位論文「類書の伝来と明文抄の研究」を、あさま書房より刊行されている。

その後、学兄は大東文化大学の教授となり、ついで大東文化大学東洋研究所の所長となって、日中文学の比較文学的研究班を組織され、十名の班員の頭となって、芸文類聚の訓読を刊行し、遂にその第一巻を「芸門類聚（巻一）訓読付索引」の題名の下に刊行され、以下続刊されている。この芸門類聚なる書は、唐の欧陽詢の勅を奉じて撰したもので、全一百巻（類書）という。誠に歴大なものである上に、その内容も至って難解であるので、我が国に於ても未だ訓読を試みた人はいない。

その内容は「天・歳時・地・州・郡・山・水・符命・帝王、以下四十八部に分ち、まず事実を記し、次にそれに関する詩文を録したもので、その歴大さは、一年に一篇を取り扱おうとすれば、一百年の歳月を要することとなる。誠に踏破しがたいジャングルにも似た難関である。氏は前述のように所長となって、十名から成る精鋭なメンバーを組織して敢然として、この一大事業に立ち向かわれた。——爾来、一年毎に一卷（一冊）の刊行をつづけている学兄に対しては惜しめない拍手を贈りたい。

このように述べて来ると、学兄はいかにも訓話一点張りの固苦しい、いわゆる「旧い形の漢学者」かと思われるかも知れないが、^(ママ) 真実はこれ等と異り、常に詩を賦し、隨草をつづられる風流を解するお方でもある。先年いただいた「朗日楼荃軒詩並びに遠藤千鶴子南画集」平成十一年（1999）のご作品集は正に学兄の漢詩集と、ご夫人の絵画との合作であって、無言のうちに夫唱婦隨まことに円満なるご家庭のご様子がしのばれる。

その後、これまたご恵贈いただいた玉作「私の心象風景」平成五年（1993）著の見返しには、学兄自から墨筆を振るわれて「詩歌者吾人之糧、心之友也」との十一文字を誌された。私はこれを拝誦し、次のように解した。

“詩歌こそは、この自分にとっての英気を養ってくれる^{かて}食糧であり、まだ心をかよわせる掛替のない友である。”と。

私はこれを誦んで今更のように、学兄の日夕詩歌と共に過ごされる心

境をうらやましくさえ思うことであった。

私はこの「私の心象風景」の他に^(ママ)左記の詩文集を贈られている。

◎天地有情五家詩 平成十二年(2000)

◎続天地有情四家詩 平成十四年(2002)

◎朗日楼荃軒詩文 平成十七年(2005)

私は、これらのご著書をいただく度に感銘を受けることが二つある。その一は、ご著書にはいずれも和文の序とともに漢文体の序を付されていることである。昨今、漢詩を賦される人は少くないが、序文を漢文体で記す方は至って稀である。その第二は、ご惠贈くださるご著作には、必ず自筆の鄭重なるご挨拶状が副えられていることである。昨今のこの目まぐるしい世の中に在っては、大概の著者は寄贈書の発送を出版社に依頼し、出版社は著者のもとめに応じて「進呈」の二字を付して郵送されることが多い。忙しいスピードの世の中故に、已むをえぬこととは察しながらも、何とも味気なさを覚えるひと時である。

○次のページに学兄の詩集「私の心象風景」の首に冠した「漢文体の序」を掲げてみたい。(※割愛。)

○学兄は大東文化大学と、財団法人無窮会東洋文化研究所との双方に勤められ、両者間の融和交流に尽くされた功績は大きい。

右両者巻、御就任の経歴

昭和五十八年(1983) 財団法人無窮会評議員となる

昭和六十年(1985) 大東文化大学東洋研究所の教授に就任

平成五年(1993) 大東文化大学東洋研究所所長に就任

平成五年(1993) 無窮会東洋研究所所長に就任

○進藤英幸氏(昭和三十二年、大東文化大学第六期、中国文学科卒)

氏は嘗て、大東文化大学同窓会々長の重任を見事に果され、現在は無窮会東洋文化研究所々長にご就任の上、「東洋文化」の編集委員会委員を兼務されている。氏は殊に金石学・説文学等の古代中国の文字学に精しく、

幾多の研究論文を発表されている。

○河村広通氏（昭和三十一年、大東文化大学中国文学科卒）

氏は無窮会評議員に選任され、目下、無窮会東洋文化研究所教養講座の「史伝講義」を担当されながら大東文化大学の講師を兼任されている。氏は中国古代史に詳しく、また書家として名をなしている。（元、都立駒場高等学校教諭）

○石井勲氏（昭和十七年、大東文化大学学院高等科卒）

氏は、無窮会評議員に選任され、また、元大東文化大学幼少教育研究所々長であった。

氏は終生、漢字普及運動に全精力を燃し尽した。——終戦後日本の国語教育は国語審議会が我国の敗戦を機に新仮名遣いを作り、漢字を次第になくしていこうと云う戦略をたてた。石井氏はこのような行き方は誤りであると気づき、その後幼児教育に取り組んだ。そして幼児の柔軟な頭脳は驚異的に漢字を理解しうることを発見し、その事実を幾多のデータで証明した。そして終生、漢字普及運動に全精力を燃し尽した。昭和二十六年（1951）に、全日本国語教育協議会全国大会の席上、漢字の重要性を発表、二十八年（1953）には、氏の奉職校なる新宿区淀橋第一小学校で研究を始めた。四十三年（1968）には幼年国語教育教会を発足、四十八年（1973）には石井教育研究所を設立、平成元年には、第三十七回菊池寛賞を受け、平成六年には日本漢字教育振興協会々長に就任されている。

著書に、「幼児はみんな天才」「漢字興国論」「幼児は漢字で天才になる」「日本語塾」等々、漢字教育に関する書は多い。（ご逝去）

【Introduction of Research Materials】

**Hideo Ikeda's "Shugaku no dojo kaisoroku-
Nanajunen mae no Omoide no Ito wo Tagurite"
(Recalling a Hall of Learning: A Memory of
Daito Bunka Gakuin Seventy Years Ago)
Chapter3**

Nina Asanuma